4/28 毎日

高架下からも排除 心痛む

生活保護の不備実感

路上支援 民青同盟員の思い

日本民主青年同盟東京都委員会は、2008年から路上生活者支援の夜回りを毎月行っています。今年は「生活保護をうけたくない理由―可視化プロジェクト―」を立ち上げ、都当局への要請や記者会見をしました。活動を続けるアキさんとユイさん（いずれも仮名、大学2年生）の思いは―。

（小酒井自由）

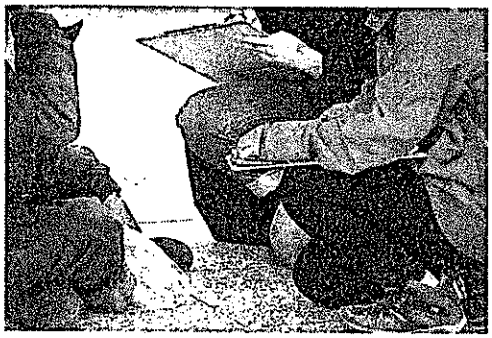
若者BOX ワカモノボックス

夜回りの場所は、新宿駅周辺です。同駅は、鉄道各線が乗り入れ、周辺は繁華街や都庁があり絶えず人が行き交います。コロナ禍のなか30代、40代の路上生活者が増え「2週間前から路上生活です」という人も現れています。

社会のいびつさ

アキさんとユイさんが夜回りに初参加したのは昨年12月。ユイさんは「困っている人のもとで活動したいと思っていた時、夜回りに誘われました。栄えている街の裏側を見て、社会のいびつさを実感した」と振り返ります。2人は同プロジェクトの中心メンバーにもなりました。

今年2～3月にかけて52人に聞き取りをしたところ、74％が生活保護を利用したくないと答えました。



路上に座っていた男性（左）に聞き取りを行う（右端から）アキさんとユイさん＝19日、東京都新宿区

「国と行政を変えなければ」

理由は、▽保護費が低い▽親族への扶養照会が壁になる▽劣悪な環境の施設に入居させられることがある―などで、制度の不備を浮き彫りにしました。

夜回りでは、聞き取りをしていた人が警備員に囲まれ排除されることも。高架下に路上生活者が居られないようにコーンとバーが並べられた現場を目の当たりにしたこともあります。

根付く自己責任

アキさんは「自分が居てはいけない存在だと言われているようなもの。目の前から居なくなればそれでいいのか」と心を痛めます。

路上生活者に生活保護を勧めても「自分は大丈夫」だと断られることも少なくありません。背景に「無意識に『自己責任』の意識が根付いているのでは」とアキさん。ユイさんは「苦しい時に『助けて』と言ってもらえるようにしたい」と言います。

この間、支援団体や日本共産党などが生活保護の改善を求めて国・自治体に繰り返し要請するなか、厚生労働省が運用の改善を全国の福祉事務所に求める通知を出すなど運動の成果が表れています。

アキさんは「積み重ねが大事。私たちのプロジェクトも改善にむけた大きな運動の一つになったんじゃないか」と実感しています。

一方で、まだ不十分だと2人は考えています。ユイさんは保護費が低いと話を聞くことが多いと述べ、「プロジェクトで制度の問題を可視化できたが、解決するには国や行政が動かないと」と語ります。

今後の活動について2人は、「生活保護利用のハードルを下げたい。自分の周りも含めてつらい状況を自己責任にしてしまう社会を少しでも変えるために行動したい」（アキさん）、「行政の姿勢や今の制度を変えるために、今後も実情を調査したい」（ユイさん）と抱負を語りました。